



書評部門 佳作

P.N. とにかく読んで。さん 海事科学研究科 M2回生

『野生の思考』クロード・レヴィニストロース著 みすず書房

海という野生

海 といえば船だ、船といったらクイーンエリザベス号だ、ぼくは神戸の港で目の前にエリザベスを見てその巨大さに一步後じさった、しかしそれでも全貌は捉えられなかった、だからほとんどそれは宗教であり芸術の感覚だった。

とぼくにいったのはぼくの恩師である中沢さんである。大きな海を航海する船を設計し造るのはエンジニアだ。エンジニアは設計に際して、CADなどを使って必ず模型を作る。なぜなら、設計の対象を「自分」の視野の中に収めて、俯瞰したいから。「視覚化」しなければならないから。俯瞰は人を安心させる。人はすぐ安心したがる。「視覚」からの情報は構造的に人間の思考の多くを占めるといふ。俯瞰は、対象のすべてを、把握した気分、錯覚させる。

けれど、人が対象のすべてを網羅的に把握できるなんてことは絶対にない。人は全知全能でない、は絶対だ。よくよくシンプルに考えればすぐわかることである。しかし多くのエンジニアがそういう錯覚に陥りがちなのは、模型を作るという「縮減」の行為が、海に似た無限に近いひろがりを持つ人間の心にとって、本質的に激しく快感であるから。というのは文化人類学者のレヴィニストロースである。

レヴィニストロースはいまから約50年も前に、現代の抱えるだろう問題を予見して、だいたいこう言っている。「科学的思考が人間の思考のすべてを支配し、ピークに到達した文明社会には、『野生の思考』が大きく欠落しているだろう。

『野生の思考』とは、すべての人間に生まれながらにして根源的にセットされた、「宗教」「芸術」の感覚である。科学的思考と『野生の思考』のバランスを、ある均衡点に調整することが、現代の抱える多くの深刻な問題を乗り越える、ほとんど唯一の道である」